

漂流・流通・摩擦： Gertrude Stein, *Three Lives* 論

勝田悠紀

序

Gertrude Stein の *Three Lives* (1909) に収められた三つの物語はいずれも、主人公の女性が人々の間を “wander” していく物語だと言える。“Melanctha” の中で繰り返されるこの語は、各登場人物の、そして各々のナラティヴ自体の特性を言い表している。物語の各エピソードの結びつきは希薄であり、ヒロインたちは特定の個人との関係を永続させず、時間が経つと別の相手に移っていく。ここには明らかに「定住」に対する「漂流」への欲望が見て取れるだろう¹。

「漂流」のモチーフはスタインのこの初期作品に取り組む批評家たちの関心を集めてきた。例えば Lisa Ruddick は William James の心理学を参照しながら、「固定」を志向する Jeff Campbell と「漂流」を志向する Melanctha Herbert の対照的なあり方を描き出す。その上で Ruddick は、Melanctha の “wandering” とナラティヴの “wandering” を “lack of linear causality” (34) を媒介にして結びつけ、スタインが “wandering” に否定的な William James の見方から離れこれに可能性を見出していったことに、彼女のモダニズムの萌芽を見て取っている (35)。また、John Carlos Rowe は、“wandering” の中に様々な規範に対する転覆的な力を認め、それを “all the different affective, sexual, linguistic, and cognitive practices that cannot be controlled or understood by ruling-class reason” (233) と表現している。これは、Barbara Will が論じるスタインにとっての理想的な自己のあり方とも響き合う。Will はスタインにとっての「天才」を “less as a bounded ‘self’ and more as a processual and relational ‘being’ emerging in and through textual practice” (8) と定義し、“decentered, dialogic, relational notion of ‘genius’” (10) を確認した上で、Melanctha をその体现者だとしている (38)。

これらはいずれも概ね妥当な評言だととりあえずは言える。しかし私には、ここで批評家に暗黙のうちに共有されている前提——スタインが *Three Lives* の執筆を一つの契機として文学的、社会的慣習から次第に離れていったという経緯や、その結果出てくる「固定」から「流動」へというイメージ——が、Anna や Melanctha の生き方の微妙な実態を見えにくくしている面があるように思われる。のちに示すように、本作における “wandering” の様態やそれへの評価は実は一枚岩でなく、複数のヴァリエーションが

あるからだ。本稿の関心の一つは、Anna や Melanctha において表現されている自己像、他者との関係性を再検討し、そうした “wandering” の多面性を描き出すことにあ

る。この「固定」から「流動」へという見方について考えることは、必然的にスタインが *Three Lives* の段階で取り組んでいた言語実験をどのように評価するかに関わっているはずである。というのもこの見立ての背景には、“Melanctha” の前身となった *Q.E.D.* (1903)²、比較的早い時期に書かれた “The Good Anna” 及び “The Gentle Lena” から、“Melanctha” へと執筆が進むにつれ生じた文体の変化が、まさに「固定」から「流動」へという方向性を示すものだったという一般的な了解があるからだ。

Three Lives の言語的スタイルについてもすでに様々な分析が行われているが、スタイン自身が *Three Lives* の執筆との関連で言及した二つの固有名詞が、分析の二つの主要な方向性を規定しているように思われる。“She had begun not long before as an exercise in literature to translate Flaubert’s *Trois Contes* and then she had this Cézanne and she looked at it and under its stimulus she wrote *Three Lives*” (*Autobiography* 39) . セザンヌとフロベール、キュビズムとリアリズム。この二択が、選択されるべき足場になっているようなのだ。前者は基本的に、テキストの「表面」に現れた配置にこだわる。例えば Dubnick はキュビズム的 “decentering of composition” に注目し、すべての文が均等な重要性を与えられてクライマックスがないことを指摘する (18-19)。この観点をさらに進めた Heldrich は、スタインとセザンヌの “a foregrounding of surfaces” (427) を重視し、ショート・ストーリー・サイクルという形式を含めた「メトニミカル」な言語の働きを “Connecting Surfaces” として論じる。こうした記述は、それまでの散文とは明らかに異質の、反復が横溢する *Three Lives* のテキストの特徴として、押さえておく必要があるだろう。しかしこのキュビズム的な「表面」という発想だけで、スタインの散文の十分な説明とすることは難しい。Anna の “romance” や Melanctha、Jeff の “wisdom” など、その裏にある何かを読ませようとする記号にもまた、このテキストは満ちているからだ。他方、DeKoven、Haselstein、Walker らのグループは、それぞれの立場から、登場人物と彼女らを表現する言語の微妙な差異 (“voice” と “content” の不一致 [DeKoven 29-30])、語り手あるいは言語の表象能力の限界といったポイントに注目する。そこでは登場人物は、語り手の「向こう側」で読者に解釈され救出されることを待つ存在、Heldrich の言い方との対比で言えば、メタフォリカルな位置にいる存在として想定される。Walker と Haselstein がともにフロベールとの比較を議論の出発点にしていることから察せられる通り、この着眼点は十九世紀リアリズムの問題意識の延長線上にあると言えるが、この見方では、以下で論じていくことになるメトニミカルな横の関連性が盲点になってしまう³。

「キュビズム」と「リアリズム」という上記の先行批評の整理を前提とした上で、スタインの新たな散文により適切な評言を与えることが本稿のもう一つの狙いである。そ

の過程では、それぞれの作品において、スタイルと内容の“wandering”のあり方がどのように絡み合っているかを検討することが不可欠となる。そこでは、書かれた時期に基づいて“Anna”及び“Lena”が伝統的、“Melanctha”が革新的とされてきたこと自体の問い直しが含まれることになるだろう。

主として上記の二つの関心のもと、本稿では主に“The Good Anna”と“Melanctha”を取り上げる。この二編の連続性と対照性のねじれた関係を考えることが、上記の問題にアプローチする最も適切な方法だと考えられるからだ。以下ではまず最初の二章で、“The Good Anna”と“Melanctha”における“wandering”の様態を検証し、その「漂流」性がどのようなものかを明らかにする。第三章ではそれを元に、この二編の結末——AnnaとMelancthaがどのように死に至るか——を検討した上で、両者のスタイルを比較し、それぞれの内容とスタイルとがどのように対応しているのかを論じる。第四章では、「漂流」に対立する概念として第三章で提案する「摩擦」の具体的なあり方を探求する。“The Good Anna”のネガとも言える“The Gentle Lena”、及び“Melanctha”の原型であるQ.E.D.は、比較対象として適宜参照する。

1. “The Good Anna”：Annaは何に惹かれているのか

“The Good Anna”のヒロインであるAnnaの住む世界、彼女の人物像には、一面「固定」性が際立つと言える。Bridgepointに定住する彼女は、*Three Lives*の三作品に共通の舞台であるこの街から出ることがない（“she could not yet go away from Bridgepoint” [38]）。“good”であることに執着を見せる彼女は確固とした規範の持ち主であり、他人のフラフラした様子を許すことができず（“The good Anna could not understand the careless and bad ways of all the world and always she grew bitter with it all” [49、以下下線は引用者]）、むしろその規範を他人にも強要し支配を確保する人物だからだ（“with that name the good Anna always conquered” [3]）。

しかし彼女は、特定の個人と固定的・永続的な関係を結ぶことがなく、むしろ徹底してそうした関係の外に立ってもいる。Annaの生涯で唯一の“romance”の相手であつたらしいMrs. Lehntmanへの支配力（“Anna’s strength in her control of what was done in Mrs. Lehntman’s house” [35]）を失ったことについて、語り手は以下のような説明を与える。

It is only in a close tie such as marriage, that influence can mount and grow always stronger with the years and never meet with a decline. It can only happen so when there is no way to escape. (36)

「結婚」のような「緊密な結びつき」（“close tie”）がなければ「影響」は持続せず、そうした縛りがなければやがて関係性は薄れていってしまう。しかしAnnaはそう

な「逃げ道がない」制度的な関係には入らず、Mrs. Lehnman への影響力を逃してしまふのだ。このことは、自分が結婚して家族を作らないことだけでなく、彼女の「親戚」からの距離においても確認できる。“Poor Anna, and she did not love them very much, these relatives of [Mrs. Federner’s], and they were the only kin she had.” (33) 自分の「唯一の親戚」である、兄 Mr. Federner の子供達、つまり自分の甥、姪を、彼女は好きになることがない。この物語には Wadsmith 家や Miss Mathilda 宅を含めいくつもの家族、家が登場するが、女中の Anna はあくまでそこに帰属はせず、一時的に留まるだけなのであり、その意味で “The Good Anna” は Anna が複数の家族の間を移動していく物語だと言える。

興味深いことに、Anna が特に愛着を感じているらしい Mrs. Lehnman と Miss Mathilda (“Miss Mathilda was not a romance in the good Anna’s life, but Anna gave her so much strong affection that it almost filled her life as full” [42]) は、共に「漂流」的な性質を持った人物である。“Miss Mathilda was given to much wandering and often changed her home, and found new places where she went to live” (50) とある通り、Miss Mathilda は「しばしば家を変え」、ひと所に留まらない、“wandering” な人物である。上記の箇所は “The Good Anna” 中唯一 “wander” という語が使われる箇所であり、その意味で Miss Mathilda は Melanctha を予感させる人物だと言える。Mrs. Lehnman は “diffusive and careless” な人物であり、“she never worked such things for her own ends” だとされる (33) ⁴。特定の「目的」に向かない「拡散的」な Mrs. Lehnman のあり方も、やはり Miss Mathilda と同じ方向性を示すものだろう (“diffusive” という語は、「序」で引いた Barbara Will の “decentered” といった語とも響き合う)。Anna は自分の「固定」的な面に反して、こうした傾向に魅力を感じているように見えるのだ。

一方で「固定」的な性質を持ちながら同時に「漂流」するために、Anna はどのような方法を取るのだろうか。Anna による他人の支配を端的に表すのは作中で繰り返される “scold(ing)” という語 ⁵ だが、これは単に Anna による他者への攻撃を示すのではなく、むしろ彼女はこれによって他者と繋がり、他者の間に出て行こうとする節がある。Part I での Molly ら女中たちに始まり、Miss Mathilda、Dr. Shonjen (“The doctor really loved her scoldings as she loved his wickednesses and his merry joking ways” [23])、Mrs. Drehten の 娘 (“The girls were all so good that her scoldings here were only in the shape of good advice” [30])、その他の人々や動物とまで (“But truly she loved it best when she could scold. Now it was not only other girls and the colored man, and dogs, and cats, and horses and her parrot, but her cheery master, jolly Dr. Shonjen, whom she could guide and constantly rebuke to his own good” [23])、 “scold” を媒介にしてつながっていることがわかる。姪との関係を描いた “Anna had too, no real affection for her nieces. She never scolded them or tried to guide them for their good” (32) という箇所には、「愛着」

がないから “scold” しないというロジックが見えるが、これは裏を貸せば「愛着」と “scold” が親和性を持つことを示す。また、“scold” はしばしば複数名詞化 (“scoldings”) されており、これがどこかモノのように扱われることは重要である。

“scold” に並ぶ Anna のもう一つのアトリビュートは “save” だが、興味深いことにこの語もまた、-ing(s) 形で用いられ、“scoldings” 同様人々の間に行き渡る。

[N]ew people to befriend, people who, in the kindly fashion of the poor, used up her savings and then gave promises in place of payments. (43)

Even a thrifty german Anna was ready to give all that she had saved . . . There was no certain way to have it for old age, for the taking care of what is saved can never be relied on, for it must always be in strangers' hands in a bank or in investments by a friend. (43)

当然これらは、第一義としては Anna の善意が搾取されることを描いた箇所だが、にも関わらず（あるいは実際にはそれと矛盾することなく）、“savings” を通じて彼女が人々と緩やかに関係し、その中に出て行っていることは事実である。金はそれ自体の価値によって、Anna の意思を離れて人々の手を渡って行き、「見知らぬ人の手」にまで至る可能性を秘めている。

“The Good Anna” における “scoldings” と “savings” の役割には類縁性が認められる。“Anna scolded and cooked and sewed and saved so well” (42) というように、いくつかの箇所で “scold” と “save” が併置されている。さらに “However it paid Anna to bring about this marriage, paid her in scoldings and in managing the dull, long, awkward Julia, and her good, patient, stupid Charley” (48) ではまさに “scolding” が金のように (“pay” の対象物として) 扱われている。先に “scolding” がモノのようであることを指摘したが、より具体的にはそれは、“scolding” が人と人との間で手渡しされ広まっていく通貨のイメージを与えられていることを示すようなのだ。ここまで来れば、彼女の一部たる “scoldings”、“savings” によって、Anna が求める漂流的な自己像に接近していることが見て取れる。金に目的地はなく、隣接した人々の間を流れていくだけだ。彼女の主体性による求心的なコントロールを離れて、“scoldings” と “savings” が人々の間に染み入るように拡散していくのだ。

“savings” と “scoldings” のこの特性を、さらに別の観点から考えてみることもできる。この二語は頭韻を踏んでいるが、これはおそらく偶然ではない。“The Good Anna” には、s 音の頭韻への執着が見えるからだ。

I scold her, and she don't seem to hear and then she swears so that she scares me . . . (6)

And I slave and slave to save . . . (10)

The boy was easier to scold, for scoldings never sank in very deep . . . (24)

She cooked and saved and sewed and scrubbed and scolded. (33)

いずれも過剰な s 音での頭韻を示している。s 音への意識はさらに、次のような箇所にも見える。“Anna always had a humorous sense from this old Katy’s twisted peasant English, from the roughness on her tongue of buzzing s’s and from the queer ways of her brutish servile humor” (7) . Walker は、スタインの散文においては音声がシンタックスとは別の次元で鎖を形成する「詩的言語」だと述べており (40)、これはその典型的な例であるが、それと同時に、“scold” と “save” を含む各語の s 音を介したメトニミックな繋がりは、意味や意図に回収されず隣接性によって広がっていく Anna の “savings”、“scoldings” の特性と見事に共鳴している。Anna の「漂流」は、“scoldings” や “savings” の「流通」によって達成されることが確認できる。

この2つのモチーフは作品全体に渡っているが、「流通」が上手くいっていることを示す指標として、「食事」と「笑い」というモチーフが Part II の後半に現れる。

She cooked and saved and sewed and scrubbed and scolded. And every night she had her happy time, in seeing her Doctor like the fine things she bought so cheap and cooked so good for him to eat. And then he would listen and laugh so loud, as she told him stories of what had happened on that day. (33)

このパッセージの第一文は s 音の頭韻を示すためにすでに引用したが、この動詞の並びには他とはやや不釣り合いな “cook” も含まれており、ここで彼女が「医者」に渡しているものは金ではなく「食事」である⁶。こうした関係性が上手く機能している時に彼女はそれを「幸福」だと感じることも、ここから確認することができる (“happ[iness]” については三章でも触れる)。「笑い」については、以下の箇所が参考になる。

They always came together for their supper . . . Here Anna and the boys gave it to each other in sharp hits and hearty boisterous laughter, the girls made things for them to eat . . . (30)

少女たちによって「食事」が作られると同時に、Anna と少年たちは「笑い」を互いに

やり取りすることにより交流している。Anna はしばしば男性との方がうまく「流通」を成功させられることは第三章で改めて述べるが、ここでも Anna は誰よりも少年たちと「笑い」の交換を楽しんでいるようだ。そうしたモチーフに気をつけて見れば、先ほどの「医者」との「幸福な時間」にも「笑い」があった。

このように Anna の「漂流」を実現させる “scoldings”、“savings”、“cooking” を彼女が他人への “help” あるいは “care” として行っていることは作中に繰り返しこの二語が出てくることから明らかであり、それが彼女の女中としての仕事でもあるわけだが、最後に指摘しておきたいのは、この「他人の世話」に必ずしも彼女の感情は必要ないらしいことである。

There was no friendship, no affection, no liking even for the man this woman cared for, no claim of common country or of kin, but in the kindly fashion of the poor this woman gave her all and made her house a nasty place, and for a man who was not even grateful for the gift. (44)

「贈り物」をする、「彼女の全てを与える」のに、「友情」や「愛情」、相手の「感謝」は Anna には不要だ。ここでイメージされている「世話」はしたがって、主体の意思による善意の行為というより、自動的に行われる非主体的な「義務 (“duty”）」(54) に近い。そしてこの自動化された非人格的な義務という観念もまた、それ自体で持ち主の意思とは無関係に流通していく “savings” と、明らかに共通のものを持っている。ここまでの議論を踏まえるならば、このパッセージが喚起する「義務としての世話」のイメージは、「漂流」を目指す Anna の理想の一つの到達点と言えるだろう。

2. “Melanctha” における発話の漂流

上記のような “The Good Anna” 読解は、“Melanctha” を読み直す手助けにもなる。手始めに、“Melanctha” においては何が「漂流」しているのか、Anna にとっての “scoldings”、“savings” に当たるものが Melanctha にとっては何なのかと考えてみたい。それは何よりもまず、彼女の口から発せられる言葉だろう。

作品前半、恋仲にある Melanctha と Jeff との関係は、大半が互いのセリフで成立している。言葉の塊と化したこのセリフ群は、*Three Lives* の中でも最も独創的だと見なされている部分の一つだ。この箇所は、一方ではミメシスの側から評価されてきた（これは「序」でまとめた内の「リアリズム」のグループに近い）。例えば Walker はスタインの方言再現欲求を指摘したのち (21-22)、自ら喋る中で Melanctha や Jeff が言葉に敗れていく過程を読み取っている (33)。その具体的な表れとして good / bad という語に注目し、最初は自明だったこのカテゴリーが混乱していく経過を追っている。これは Walker によれば、言語が不十分な人々の言語の様式化だということになる。こ

うした読み方は、Melanctha らにより発話された言葉のふるまいが二人の心的状態を反映していると受け取っており、再現の物理的な忠実さに差はあれ基本的に彼女らの言葉をミメティックに読んだものとまとめられる。しかし、Michael North は「仮面」としての人種を論じる過程でアフリカ美術に触れ、そこには「背後にあるものを暴くこと」と「記号の記号性を示すこと」（芸術の慣習自体を明らかにすること）、「ナチュラリズム」と「抽象」の両方の要素があるとした上で、“‘Melanctha’ seems the first representation of this paradoxical reality” (64) と述べている。前者の「ナチュラリズム」はここで「ミメシス」と呼んでいるもののことだが、それには留まらない要素が“Melanctha”の言葉にはある。以下ではそちらの方に話を向けてみたい。

段階ごとに特定の語句が反復されがちな本作の中で good / bad の反復は全体に渡っており、本作における繰り返しを考える際 good / bad は有用な着眼点だと言える。このポイントの重要性は、Q.E.D. において単に「ひどく」という意味でしか用いられていなかった“badly”が本作で圧倒的に役割を拡大していることから確認できる。以下は関係が破綻に近づきつつある Melanctha と Jeff が十ページほどに渡って繰り返す言い争いの一部である。

[Jeff says] “I got a new feeling now, you been teaching to me . . . like I always before been thinking was bad to be having, all go together like, to make one good big feeling. . . and then I always get so bad to you, Melanctha, and I can’t help it with myself then, never, for I want to be always right really in the ways, I have to do them. I certainly do very badly want to be right, Melanctha . . . and then I certainly am awful good and sorry, Melanctha, I always give you so much trouble, hurting you with the bad ways I am acting. . .”

“No, Jeff, dear, . . . All I can do now, Jeff, is to just keep certainly with my believing you are good always, Jeff, and though you certainly do hurt me bad, I always got strong faith in you, Jeff, . . .” (112-13)

“badly”という語は、元々前半で Melanctha の中に芽生えた新しい「力」（“the power she had so often felt stirring within her” [66]；これはもちろん性の目醒めを強く意識させる）の記号として用いられていた。“Melanctha did not know what it was that she so badly wanted” (67) というようなフレーズが繰り返されるうち、読者は“badly”とその「力」を脳内で自動的に結び付けるよう誘導される。しかし上のパッセージでは、「“bad”だと思っていたもの」が“one good big feeling”を作るという逆説（なおこの“good”は“big”を強調する副詞とも取れる），“badly”に“right”であることを望むという正邪のカテゴリーの混乱、“good and sorry”と成句化してしまう語法上の揺れ⁷など、good / bad がひたすら拡散的に用いられる様が見て取れる。続

く Melanctha のセリフにおいても、最初は規範に忠実に “good” である Jeff に対して “bad” になるよう求めていたはずの Melanctha (84) が、ここでは通常の good / bad の用法を受け入れているようであるという引っ繰り返しが見られる。

一方ではこれは、二人の感情の激しさや知的な混乱をミメティックに表していると思われる。しかしここで読者が受け取るのは、good と bad が取り違えられたり逆転されたりしていることが示す混乱の情報だけなのだろうか。good / bad の「意味」、この語が表す「内容」に定位することで得られる「混乱」の感覚とは別に、good / bad という語がもはや意味に関わりなくただ定期的に口にされることで会話が進んでいるという印象がありはしないだろうか。実際読者がこのパッセージを読むとき生じるのは、good / bad が前とは違った意味で使われていることを意識し注意深くなるのではなく、次第にその意味を気にしなくなり、good / bad という語がそこにあることのみを確認するようになることだと思われる。good / bad に注目することで前景化されてくるのは、意味の混乱よりもむしろ、言葉がそこに込められた意図・意味から離れ浮遊するように交換されていることそれ自体なのではないか。本稿ではこのミメシスからはみ出すものに注目したい。なぜならこの点において、Melanctha の言葉は Anna の “scoldings” や “savings” の交換と重なるからだ。

これは “Melanctha” における会話全体の特徴に繋がっている。スタインの文章がしばしば意味以外の要素に重点を置いていることはこれまでも指摘されてきたが⁸、この会話で際立っているのは、今ここで言葉の流通が生じているという感覚そのものである。ロラン・バルトは記号と記号内容との結びつきからはみ出すものとしての「これは現実だ」という半ば不気味なメッセージを「現実効果」と名付けたが (194-95)、これを援用して言うならば、ミメティックな記号と記号内容との連関からはみ出たところに生じる「これは流通している」というメッセージを発するのが Melanctha たちの言葉の働きだ⁹。“scoldings”、“savings” が指し示していた「流通」のあり方を、Melanctha たちのセリフは一つの出来事として実演していると言える。

彼女らのセリフはまた、“The Good Anna” における “savings” の「自動化」という特徴も共有しているように見える。「意味」への意識が希薄であることは、その言葉が発話者の意図の支配とは離れたところで、非人格的に流通するものであることを示唆するからだ。あらゆる位置に挟まれる互いの名前の呼びかけも、そこに相手への感情が読み取れるというよりは (あるいはそれと同時に)、ただランダムに、機械的に挿入されているという印象を与える。二人の間を非人格的に行き交うものとして、すなわち “wander” するものとして、Melanctha らの言葉は流れるのだ¹⁰。これは必然的な結果として、言葉の上では個人の境界を希薄化する方向へと向かう。彼女らの関係を進めたのは自分の意思ではなかったのだという様子の Melanctha に対して、自分の意思と相手の意思をはっきり確定させるよう望む Jeff の反発 (122-23) は、こうした事態への抵抗と取れる。この点については、Q.E.D. との比較からも考えることができる。Q.E.D. のセリフには圧倒的に「独り言」が多いが、これは個人の境界を確保する方向

に働くだらう。それに対して“Melanctha”では「独り言」が姿を消した。このことは、スタインの関心が人物の「間」にあるものとしての発話に移ったことを示すはずだ。

“Melanctha”は彼女とJeffとの関係が終わるところで明らかに雰囲気を変える。「漂流」する彼女の言葉は次第に減っていき、代わって彼女自身が“wander”を再開する。彼女は複数の人との関係の中を流れて行き（“But mostly it was Rose and other better kind of colored girls and colored men with whom Melanctha Herbert now always wandered” [148]）、特にJem、Rose、Samと深く関わる。Melancthaが関係した人物の名前をJane、Jeff、Jem、Rose Johnsonと並べてみると、“The Good Anna”に見られた頭韻によるメトニミックな横滑りの感覚がここにもかすかに認められることに気づく。また、MelancthaはRoseに対して、Annaと同様「女中」のようにふるまうわけだが（“Melanctha demeaned herself to be like a servant” [151]）、“The only comfort Melanctha ever had now was waiting on Rose till she was so tired she could hardly stand it. Always Melanctha did everything Rose ever wanted” (159) という箇所では、Roseに対するMelancthaのサービスが「常に」、「疲れ果てるまでやってしまう」ものであることが示されている。ここにもまたAnnaに見られた非人格的な、自動化された世話が現れているのであり、MelancthaはAnnaの理想状態をいくらか共有していると、とりあえずは言えそうだ。

3. 二人の死と言語的スタイルの関係

以上の二つのセクションでは、AnnaとMelancthaにおける“wandering”の諸相を見てきたが、そこでは二人の望む“wandering”のあり方が最終的にある程度実現されている様子が見て取れた。しかしそれにも関わらず、*Three Lives*の三つの物語はいずれもヒロインの死に収束していく。彼女たちが理想的な生を実現しているのならば、なぜ彼女たちは死ななければならないのか。

Part IIIでAnnaは、去っていったMiss Mathildaが残した家を譲り受け、「下宿屋」(“boarding house”)を営んでいる。そこではMrs. Lehntman、Miss Mathildaといった特定の相手との関係は持たず、下宿人は男性しか受け入れていない（“she found some men, she would not take in women” [52]）。Mrs. Lehntmanの娘Juliaとは上手くいかないが息子Willieとの間では“scold”が上手く機能するという挿話が示す通り¹¹、彼女は男性との方が「流通」を障害なく円滑に進めることができるのであり、他方“Most women were interfering in their ways” (38) とあるように、女性とはそうはいかないのだった¹²。そんな下宿屋をAnnaは大変上手く経営している。

They [the boarders] loved her scoldings and the good things she made for them to eat. They made good jokes and laughed loud and always did whatever Anna wanted. . . . (52-53)

Anna worked, and thought, and saved, and scolded, and took care of all the boarders, and of Peter and Rags, and all the others. (55)

ここには“scoldings”、“the good things . . . to eat”、“laughed”、“saved”と、Annaが他人との間でやり取りすべき四つの要素が出揃っており、彼女は他人との中に分け入っていくための道具立てを完備しているようである。彼女に反抗してくるものはおらずその意味で「流通」は完全にスムーズなものであり、だからこそ彼女は“take a rest”、“stop working”することがない (55)。Chessmanの“Happiness occurs in Anna’s world when she can scold and no one answers back” (27) という言葉に従えばここにAnnaの「幸福」があるはずであり、第一章で論じたことを踏まえればこれは彼女の理想的状態であるとすら言えるはずである。しかしまさにこのことが、彼女を死に近づける。

There was never any end to Anna’s effort and she grew always more tired, more pale yellow, and in her face more thin and worn and worried. (55)

「終わり」(“end”) もないほどにスムーズに「流通」を機能させ漂流してられる。しかしそれでは彼女は生き続けられないのだ。このことは、彼女にとって必要なことが、自分をメトニミカルに流通させ拡散的かつ非人格的な自己を手にすることだけではなかったことを示している。そこに欠けているのは、流通の「妨げ」になるもの(“interfering” [38])、おそらく Mathilda や Mrs. Lehntman との間にはあった「摩擦」とでも呼ぶべきものである。二度繰り返される “Anna’s life in these days was not all unhappy” (53) というフレーズは、前に引いた “happy” 同様 Anna の「流通」が上手く行っている穏やかで心地よい状態を表すと同時に、“happy” と “not all unhappy” との微妙な差が、ほのかな悲しみをも醸し出す。

「摩擦」のないあまりにスムーズな流通が死につながるという Anna のこの事態を、*Three Lives* の第三短篇 “The Good Lena” のヒロインが裏側から照射している。活動的に情熱に満ちた Anna と、常に受動的で情念に欠ける Lena は対照的な性質を示しているが、その実二人が死に至る過程には共通点がある。“Yes it was all a peaceful life for Lena. The other girls, of course, did tease her, but then that only made a gentle stir within her.” (172) “The Gentle Lena” においては、Lena の “peaceful[ness]” はそのまま彼女の “careless[ness]”、そして “lifeless[ness]” (193) につながっている。彼女は他人との交流から疎外されているわけではなくむしろ “scolding” を伴うそのネットワークの中にいるが、それは Anna の “arduous life” のようにはならない、“a gentle stir” でしかないものに留まる。“peacefulness” は「生」よりも「死」に近いものなのだ。こうして二人は、「摩擦」の伴わない「穏やかさ」は

死を意味するという共通のロジックに従っている。

“Melanctha” の場合はどうか。Anna が最後まで流通の中にいながらその性質の変化によって死んでいくのに対し、Melanctha は明確に流通のネットワークから疎外されていく。彼女は Rose に見捨てられ、Jem も街から出て行ってしまう。“[S]he did not know how to bear this blow that almost killed her” (165-66) とあるように、Jem が去るという知らせは、Melanctha に死を意識させるほどの衝撃を与えるのである。そもそも彼女の言葉は中盤以降どんどんテキストの表面から消えていったのであり、“Melanctha” の最後に現れる台詞も、あれほど多く喋っていた Melanctha の言葉ではなく、Rose から “anybody” へのものである。後に述べるように本作の中で重要な「知」の流通からも、彼女は疎外されたことが強調される (“but she don't never know . . . no she never no way could learn, what was the right way she should do” [167])。終盤の彼女は、Rose や Jem、語り手も含めた外的な力によって、流通の場から排除されているように見える。第二章の最後で触れた Melanctha の自動化は、実際には流通に積極的に関わる手段を失ったことにより彼女に強いられた受動性の表れだったとも言える (“Melanctha dreamed herself . . . always to be scolded, by this ordinary, sullen, black, stupid, childish woman” [151] とあるように、最終的に Melanctha は Rose に “scold” される位置に立つ)。

図式的に整理するならば、主人公の死を通して、“The Good Anna” では「流通」の位相、「流通」の複数の質的なあり方が問題になっているのに対し、“Melanctha” では彼女が「流通」に参加している量的な度合いが変化しているのだ。

この差は、「序」で触れたスタイルの、両作品における表象のモードの差に対応しているように思われる。「序」ではテキストの「表面」への注目だけでは不十分で実際には「裏」もある旨を指摘したが、にもかかわらず、“The Good Anna” の場合、テキストの「表面」と「裏」との関係はそれほど問題化されてこない。これは二作品で灰めかされる性の要素を比べてみるとわかる。“Remember, Mrs. Lehnman was the romance in Anna's life” (20) と繰り返される時、確かにそこには Anna と Mrs. Lehnman とのホモセクシュアルな関係が示唆されているのだが¹³、その仕方は「示唆」というにはあまりにも直截的かつシンプルであり、「表面」の行間にかすかに見出されるような「裏」の気配はこの作品では極めて希薄だ¹⁴。対して “Melanctha” の場合、彼女が性を自覚し始める過程 (Ruddick はこれを “puberty” とはっきり言い切っている [31]) はひじょうにゆっくりと、曖昧に描かれている。

In these next years Melanctha learned many ways that lead to wisdom.

...

Girls who are brought up with care and watching can always find moments to escape into the world, where they may learn the ways that lead to wisdom. . . . Then when the darkness covered everything all over,

she would begin to learn to know this man or that. She would advance, they would respond, and then she would withdraw a little, dimly, and always she did not know what it was that really held her. . . . Melanctha did not know what it was that she so badly wanted. (67)

ここではまさに“wisdom”に至る道程が Melanctha の認識に沿って描かれている。“darkness”や“dimly”といった認識の不明瞭さを示す語句は、「裏」にある隠れているものの輪郭をほかすように働く。何より“Melanctha”では、それらを「知ること」がテーマとして前景化されている(“she did not know . . .”)。読者は「知ろう」とする Melanctha の「進んで」は「退がる」という遅々とした歩みと同一化するようになり、彼女が「自分を捉えているもの」を知ろうとするように、読者もテキストの向こう側に見え隠れする何かに関心を持つよう誘導される。

つまり、“The Good Anna”ではテキストの表面と裏のずれはないものとされる、あるいは開けっぴろげに認定されてその「ずれ」を埋めようとする努力が半ば放棄されることで、そこが読みの焦点にならなくなっているのに対し、“Melanctha”では表と裏の間に相克があるため、その微妙なずれに焦点が当てられる。そして、だからこそ、“The Good Anna”では一貫してテキスト上での流通の質的な様相に関心が払われ、“Melanctha”ではテキストの表面から奥へと消えてしまう主人公が描かれうるのだ。“The Good Anna”は、“Connecting Surfaces”の Heldrich の発想を更新する形で記述するなら、表と裏の関係を不安定にせずにテキストの「表面」という場を堅持することで、その平面の横の関係の中で成立する「流通」の諸相を描き出している。“Melanctha”は対照的に、裏に隠された、知られるべき真実をテーマ化して表と裏の遠近法を作り出すことで、表から排除されていく主人公を描く。これは同時に、彼女を流通の場から疎外したより大きな外部の力の存在を指し示し、ある種の自然主義的な世界観を提示することに繋がっている。

こうした対比は「序」で示した二つのスタイル(「リアリズム」と「キュビズム」)に大雑把に対応しているが、ここでは伝統・革新の関係は奇妙にねじれている。“Melanctha”はその斬新な文体によって知識が形成されていく過程を追ったことで、結果的に「リアリズム」的な枠組みを温存し¹⁵、“The Good Anna”はフロベールから出発しつつ反復や抽象名詞の多用などを試みたことで「キュビズム」的な「表面」の技法を色濃く見せることになった。“The first story of *Three Lives* is the most traditional of the three” (Doane 61) といったごく一般的な評価が前提にする直線的な進歩のモデルは、作品のこうした側面を見えにくくするものでもあり、慎重になる必要があるのだ。

ここには、リアリズムとモダニズムの関係をめぐる一つのより一般的な示唆があるように思われる。ウルフやブルーストといったモダニストたちのいわゆる「意識の流れ」文体は、ここでの用語を使えば、極めて「漂流」的な散文だった。彼女たちの錯綜した

終わりの見えない文章や、気まぐれな話題の移り変わりは、“*Melanctha*”におけるスタインの散文と強い親近性を示しており（実際スタインの“*Melanctha*”が先駆的だと見なされるのも多くの場合こうした作家との連続性においてだろう）、メトニミー的な原理を前景化させる。他方、ウルフ夫妻の出版社がフロイトの翻訳を出版していたことに象徴されるように、彼女らの作品は精神分析的な、すなわち、表面にかろうじて現れている要素が奥に隠れている何かを強く指し示し、それを読み取らせようとするという原理によって駆動されている。ここには、散文の「漂流」化が「奥」への欲求に動機付けられている様子が見て取れる。そしてこの隠された「奥行き」への志向自体は、すでに指摘したように、19世紀リアリズムが探求してきたモデルだった¹⁶。

他方、モダニズム前夜の過渡期には、見かけ上19世紀リアリズム的な散文でありながら、より本質的に「表面」への関心に駆動された作品群が現れていた。澁澤龍彦が『さかしま』の「極度にバロックのかつ装飾的」であり「主人公の正確の造形や心理の分析よりも、むしろ彼の自我を弛みなく無限に解体していく方向に向かう」「発端も終わりもない唐草模様のような平面的な描写」をもって、それを「反＝小説」と呼んだ時（372-73）、そこに見出されていたのは「表面」への希求だったと思われる。他には「自然は芸術を模倣する」というテーゼのもと、生身の自己よりも表面としての「肖像画」が主導権を握るというアイディアを追求した『ドリアン・グレイの肖像』、ステイヴンソンやキプリングの冒険小説の乾いた文体などが想起される。これらはそれぞれ異なった仕方で「深さ」のモデルとは別の道を探ろうとしているという意味で、「反19世紀リアリズム的」＝「反小説的」だと言い得る。そしてこの「反小説」性は、“*The Good Anna*”が“*Melanctha*”に対してアナクロニスティックにも革新的である仕方と対応しているのだ¹⁷。いずれにせよこの“*The Good Anna*”的戦略は、ともすれば「深さ」の発見が安易な落とし所になりがちな現在、見直されるべきであるように思われる。

4. 「摩擦」とは何か：「漂流」と「滞留」

ここで再び“*The Good Anna*”に話を戻し、Annaにとっての「摩擦」とは何だったのかを考えてみたい。Annaの一見理想的な「漂流」は実際にはそれだけで存立せず、「摩擦」が伴う必要があることを先に論じた。それは障害なく流通を成功させられる男性との間にではなく、女性との関係、特にMrs. LehnmanとMiss Mathildaとの間に見られるものだった。では、Annaと彼女たちの間にあるものは何なのか。

それはAnnaとMrs. Lehnmanらとの間にあるホモエロティックな愛着だと、まずは素朴に考えてみるができる。「流通」が非人格性を特徴としたのに対し、これは相手へのより人格的なコミットメントだと考えられ、その意味で「流通」に反することになる。“*Romance is the ideal in one's life and it is very lonely living with it lost*” (36)と言われるように「ロマンス」を失うことが「孤独」をもたらすとして、それを望まず「ロマンス」に留まろうとするのだとすれば、この「ロマンス」は「摩擦」の原

因となるはずだ。しかしここで「摩擦」と呼ぶものは、「漂流」を前提としてその上に現れた固着であり、ありふれた愛情とは異なった特徴を持っている。本節ではこの点に光を当てたい¹⁸。

Anna と Mrs. Lehtman との関係が破綻するきっかけになるエピソードとして、作品中ほどに、Mrs. Lehtman が「大きな家」を借りたいと言い出すという出来事がある。Mrs. Lehtman は問題を抱えた女の子を、家や仕事に戻るまで泊めてやるという活動をしており (“Mrs. Lehtman always loved best in her work to deliver young girls who were in trouble” [34])、それを新たに「大きな家」で行いたいと言うのだ。Anna はこれに強く反対するのだが、結局は Mrs. Lehtman の希望が通り、Anna もこれに協力することになる。その過程で二人が行う作業として、“fix up [the house]” という「固定」を強く意識させる表現が繰り返し用いられることで (35-36)、この家にはある種の「固定」のイメージが付与されている。そうして「大きな家」が準備されるのだが、このエピソードはベイススめいた結末を迎える。

Somehow it was Anna now that really took the interest in the house. Mrs. Lehtman, now the thing was done seemed very lifeless, without interest in the house, uneasy in her mind and restless in her ways, and more diffuse even than before in her attention. (36)

言い出した本人である Mrs. Lehtman は家に興味を失っていて、Annaの方が家にめり込んでいることが示されるのだ。このすぐ後で、Mrs. Lehtman が「落ち着かない」理由は、彼女に新たな男性の恋人ができたからであることが明かされるのだが、だとすると Anna が家に固着する様子を見せることは、Mrs. Lehtman が（彼女にとってはいつも通りに）「漂流」していつてしまうのを「固定」的な家を基軸にして繋ぎとめたいという欲求の表れであるかのようだ。

このエピソードは、作品の最後で Anna が Miss Mathilda の家を譲り受け、そこで下宿屋を経営するという展開と緩やかに呼応している。Mrs. Lehtman の家が預かるのが女の子のみであるのに対し下宿屋では全員男の子であることはシンメトリカルな配置となっている。また、“fix up” という表現で表されていた家の内部へのこだわりと、それが相手への愛着に結びついていることを、ここにも見て取ることができる。

Anna kept all Miss Mathilda's things in the best order. The boarders were well scolded if they ever made a scratch on Miss Mathilda's table. (53)

「マチルダのもの」、「マチルダのテーブル」という所有格の連続は、Anna が Miss Mathilda への愛着をこの家に転化していることを匂わせるだろう。Miss Mathilda、Mrs. Lehtman との間に生じる「摩擦」は、「家」への固着というイメージによって

表象されているようなのだ。

ここで議論の補助線として、本論と似た語彙を用いてスタインの *Tender Buttons* (1914) を分析した Kathryn R. Kent の論文を参照したい。Kent は経済とセクシュアリティの交錯を分析する中で、「高利貸し」(“usury”) のメタファーに注目していく。マルクス主義もブルジョワ的経済観も、用途に基づいた価値の生産を生殖と結びつけて「自然」とみなす一方、金から金を生み出すような経済を、生殖を伴わない性と結びつけ低く評価する点では一致していた。この後者の性の代表的なイメージが「高利貸し」である。スタインはこれを逆手に取り、創造的な力に転換する。具体的な「高利貸し」的技法として取り上げられるのは「地口」(“punning”) で、その力は事前に割り当てられた「自然な」単語の用法の外からやってくる (156-57)。これをさらに、経済とは対立する空間だと考えられていた「家庭」(“domestic”) の場に適応した、「家庭」を高利貸し＝ソドミー的な空間に創造的に作り変えたのがスタインの工夫である。Kent の議論をまとめれば、スタインは「家庭」の空間を「高利貸し」的な経済と言語によってホモエロティサイズしたのであり、そこに「レズビアン・アイデンティティ」が創出されたということになる (159-65)。

「流通」、「経済」のイメージから出発し、Anna にとっての「家」の持つ意味に注意を向けた我々にとって、Kent の結論は興味深いものだが、それは最終的な本論との立場の違いにおいてである。Kent のいう「高利貸し」は、本稿のいう「メトニミー」と多分に共通性を持っている。そこではともに、意味・意図・用途と結びついた記号・通貨ではなく、隣接性による作用が問題になっているからだ。けれどもすでに確認したように、「家」が Anna と Mrs. Lehntman や Miss Mathilda との関係の中に置かれる時、そこには「漂流」に抗して愛着が籠っているという印象があったはずだ。スタインは Anna と Mrs. Lehntman らとの関係を通じて家に特別な意味を付与しているが、それは Kent が言うのとは異なった仕方によってである。ここで想起されているのは、流れるのではなくむしろ、淀み滞留する場としての家なのだ。「漂流」と「滞留」とが反発しながら拮抗し「摩擦」を生じさせているのが Anna の世界である。

この「漂流」と「滞留」は、Part III に至って流通が際限なく加速し Anna が死に近づく過程の中で、互いに分離され各々がより顕著に浮かび上がってくるように思われる。Miss Mathilda の方から見てみよう。Anna は Miss Mathilda が別の地に旅立つという事実をなかなか受け入れられないが、ついに Miss Mathilda の「赤いレンガの家」に住むことを決める (“[Anna] said that she would for a while keep this little red brick house that they had lived in” [51])。Anna は下宿屋を始めて男の子たちの面倒を見ながらも、Miss Mathilda の帰りを待っている。

She hoped and waited and was very certain that sometime, in one year or in another Miss Mathilda would come back, and then of course would want her, and then she could take all good care of her again.

Anna kept all Miss Mathilda's things in the best order. The boarders were well scolded if they ever made a scratch on Miss Mathilda's table. (53)

二段落目はすでに引用した箇所だが、この流れのなかで見ると、目の前にいない Miss Mathilda への気持ちを Anna は家、特にその内部にある家具の類に結びつけていることがより明確になる（“the little red brick house that was all furnished” [52] というように家具が整えられていることに注目する記述もある）。ここでは一方に下宿人との間での流通が、他方に家への固着が、別々に存在している。前者は加速していき、後者はより濃厚になっているという形で、コンフリクトを起こしていた両者は分離し、Anna の生活は二重化されている。

Mrs. Lehntman の記述においては、後者の濃厚になっていく滞留の空間のイメージが別な形で描き出されている。

Mrs. Lehntman she saw very rarely. . . . They did their best, both these women, to be friends, but they were never able to again touch one another nearly. There were too many things between them that they could not speak of, things that had never been explained nor yet forgiven. (54)

「話せないことが沢山ある」という最後の一文は、Mrs. Lehntman との間に断絶ができていたことを示すのだが、ここで興味深いのは下線部の一節だ。二人の物理的に親密な関係性が字義通りのレベルで喚起されることが存外少ない本作の中で、“touch one another” という表現はその珍しい例である（二人の関係はひたすら “romance” と抽象的に名指されるのみだったし、“touch” という語は “The Good Anna” 中ここでしか用いられない）。しかし同時に、“touch” することはここでは「できない」のであって、その親密さは否定性に彩られている。このことを “nearly” の地口が見事に描き出している。“nearly” は一方で “in close intimacy” (OED 3) というように Anna と Mrs. Lehntman の「親密な」関係を想起させる。しかしこの語は “never” と呼応して “(not) anything like” (OED 6c) という強い否定を意味しているとも受け取れる。相手が現前しないところに（現前しないからこそ）成立する、ほとんど一人の空間での親密さといういささかオキシモロニックな感覚が、ここで想起されているのだ。

以上の議論をまとめればこうなる。Anna は非人称的な流通の世界と、家のイメージによって表現される人称的な固着の世界との「摩擦」を生きていた。しかし両者は次第に極端になって分離していき、二重性が際立ってくる。流通がとめどなく加速する一方で、固着は感情が滞留し濃厚になっていく空間の形成に行き着くのだ。そしてこの空間は、相手が半ば存在しないことによる親密さと濃密さという、独特なイメージを提供している。

このような Anna 像は、少なくとも二つのより広い文脈のなかに位置付けられるよう

に思われる。一つには、Anna のあり方を、「漂流」というモチーフの問題として考えることができるだろう。「漂流」的に物語や人物が構想されその感覚が前景化される時、そこにはしばしばある種の固着が並行して存在している。ここで詳しく論じることはいできないが、注1に挙げたような小説では、漂流と固着とが登場人物においてしばしば共存し、二重性をなしているように思われる。本節では“*The Good Anna*”に注目したのだが、この観点からすれば“*Melanctha*”にも、「漂流」的な溢れ出る言葉と同時に、彼女の内にこもる「滞留」を感じ取ることができるだろう。*Melanctha* の場合それはやはり、「言葉」の「裏」、「奥」にあるものとして想定されているように思われる。

他方、Anna を通じて、レズビアニズムないしホモセクシュアリティの表象について考えることもできるように思われる。Kent の議論は基本的に、失敗した経済としてのホモセクシュアリティという着眼点から、それを「高利貸し」、我々のいう「漂流」の方向に引きつけ称揚するものだった。こうした「漂流」的性への肯定的まなざしは恐らく、Kent が「地口」や「高利貸し」をバトラーの言う“*gender parody*”だとしていることから分かる通り（157）、バトラー的なジェンダー観を背景に持つ。それに対して本節の読解は、「漂流」のモチーフを扱う批評家たちが、その流動性を同定したところで即座にそれをより理想的だとみなしてしまうという傾向への批判・歯止めとなる。実際にはそこに「滞留」のイメージを見出すこともできるのであり、それはホモセクシュアリティの表象にとって、「流通」と同じくらい重要である可能性があるのだ。というのも、「生産」としての「終わり」を持たない経済は、規定の出口を持たない「滞留」のイメージと親近性を持ちうるものであり、さらに、同性の関係に付きまとうある種の（擬似的な）同質性は、先に「ほとんど一人の空間での親密さといういささかオクシモロニクな感覚」と述べたものと符合しうるからだ。

最後にこの「滞留」のイメージを更に明確にする上で魅力的なエピソードに触れて本論を終えたい。“*The Good Anna*”のPart Iの末尾、Miss Mathilda と彼女の友達は帰りが遅れたため、Anna が怒っていないか不安になりながら家にたどり着くと、ドアは閉まっている。

it was hard to have to think of Anna's anger at the late return, though Miss Mathilda had begged that there might be no hot supper cooked that night. And then when all the happy crew of Miss Mathilda and her friends . . . were all come together to the little house—it was hard for all that tired crew who loved the good things Anna made to eat, to come to the closed door and wonder there if it was Anna's evening in or out, and then the others must wait shivering on their tired feet, while Miss Mathilda softened Anna's heart, or if Anna was well out, boldly ordered youthful Sallie to feed all the hungry lot. (11-12)

このドアは Miss Mathilda らを締め出すのだが、肝心の Anna はドアの内側にいるのか外側にいるのかわからない。ここで一方では、家の内部に、Anna の「怒り」、感情のこもった「心」が想定されている。それは Miss Mathilda との間にあるからこそ濃密になっている感情だと言える。しかし、家のなかに Anna がいないという可能性が、同時に示される。したがって家のなかに強い感情とともに存在しているはずの Anna は、不在、否定性の感覚に彩られてもいる。これはまさに、上で Anna と Mrs. Lehntman の間にあるものとして描き出したイメージに近いものではないだろうか。そこには深く満ち満ちた他者との関係があるのだが、同時にこれが存在しないものであるという感覚が伴っているのだ。こうして描かれる「滞留」のイメージは「流通」のそれに匹敵する強度を持っており、だからこそこの両者の「摩擦」が生じ得る。Three Lives はこのように、「固定」的な人間関係を疑うことを覚えた我々がそののちに他者との生を考えるためのヒントを与えてくれる物語として、いま読み直すことができる。

注

¹ こうした点は、Franco Moretti が “the late Bildungsroman” と呼ぶ（特に 234-36）、1898 年から 1910 年あたりに書かれた小説群の特徴に非常によく似ている。これらの小説はしばしば主人公を芸術家に設定しており、ある強い「芸術」意識に支えられている。本稿では議論の中心としないが、Three Lives の「漂流」は『トニオ・クレーゲル』や『スティーヴン・ヒーロー』と並べてこうした広い文脈の中で捉え直すこともできるだろう。

² Q.E.D. は 1903 年に執筆、1950 年に死後出版された三章からなる短編小説である。この作品には自伝的要素が色濃く見られ、女性同士のホモセクシュアルな関係が明確に描かれている。スタインはこの作品を書き換える形で “Melanctha” を生み出す際、スタイン自身の分身であった Adele を Jeff Campbell という男性キャラクターに作り変えた。Q.E.D. と “Melanctha” との関係に注目した分析については、Rowe 229-30、Walker 31-33 を参照。

³ この着眼点は Heldrich と共通のものを含むが、Heldrich は一貫して「部分と全体の差異」を問題にしているのに対し、第一章で明らかにするように本稿の関心は記号や通貨が隣接性の中で流れていくこと、のちに「流通」と呼ぶものにある。したがって本稿の議論は、Walker らの見立てへの批判としてメトニミーに注目するという点では Heldrich と共通しているが、その具体的な内容は異なる。

⁴ 他にも Mrs. Lehntman には、“slackness and neglect”、“indifference”といった語が用いられている。これと対照的に Anna はしばしば「硬さ」、「凝縮」といったイメージを伴って描写される (“hard and sharp . . . stiff” [15] ; “sharp and short” [21])。

⁵ “The Good Anna” における “scoldings” については、Chessman がこれを Anna の “controlling power” だとする観点から論じている（26-27）が、本稿はこれとは別の意味合いを “scolding” に見出そうとするものである。

⁶ “The Gentle Lena” の主人公 Lena は Anna と逆に “scold” される存在で、しかもそれすら次第に失っていく人物だが、そんな彼女と唯一仲の良かった女性が “the good german

cook who had always scolded” (195) だったことは、*Three Lives* において “cook” が “scold” と並んで肯定的な象徴性を担っていることを示す。

⁷ 他に good が成句の一部として用いられている例としては、“I prove it to you now, for good and always” (113)、“And so good-bye now for good Melanctha” (136) などがある。後者は “good Melanctha” という繋がりとも取れる。

⁸ 例えば、DeKoven はそうした要素を “rhythm”、“hypnotization” などと呼び (42-43)、Chessman は “the narrator makes use of a language charged with feeling, which draws our attention away from the very content the narrator works to articulate” (52) と述べている。

⁹ 先に引いた North はスタインの反リアリズム的な側面を記号の記号性、慣習を暴露することだとしていたが、ここでは North から離れ、記号の記号性が喚起する感覚の方に話を進めていく。

¹⁰ ここでは Jeff と Melanctha の違いにはあえてあまり注意を払っていない。確かに Ruddick が論じる通り彼女らは対照的な性質を持っているが、他方で二人の言葉のふるまいには共通性が見出せる。むしろ言っている内容が違うにもかかわらず言葉のふるまいが近づいていることは、個人の境界の希薄化というここでの議論を裏付けるだろう。

¹¹ “[Anna] watched and scolded hard these days to make young Julia do the way she should. Not that Julia Lehntman was pleasant in the good Anna’s sight. . . . The boy was easier to scold, for scoldings never sank in very deep, and indeed he liked them very well for they brought with them new things to eat, and lively teasing, and good jokes.” (24)

¹² Jane よりも Edgar に (“[Anna] naturally preferred the boy” [14])、Miss Mary よりも Dr. Shonjen に (“Anna loved to work for men, for they could eat so much and with such joy” [23])、Anna は付き合いやすさを感じているようである。

¹³ スタイン作品におけるレズビアニズムについては Stimpson による古典的な論文を参照。

¹⁴ “The Good Anna” には具体的な描写も多く見られるが、Chessman が指摘しているようにこれにはフロベールの細かい描写のパロディという側面があり (30)、記号上の遊びという雰囲気も強い。

¹⁵ “Melanctha” は、Jane Harden とのホモセクシュアルな関係から Jeff Campbell とのヘテロセクシュアルな関係へという展開、知の獲得に向かって進んで行くプロットなど、存外教養小説的な構成を持っている。なお、“Melanctha” が全体として「リアリズム」的な様式に則り、彼女の疎外へと向かうプロットを持っていることと、作品のある時点での彼女の言葉のあり方が、“The Good Anna” において “savings” などが示す「流通」を身を以て実演したものであることは、共存可能であり互いに矛盾しない。対して “The Good Anna” は、作品全体の構造が “savings” 的「流通」を示すのに適した形になっているというのがここでの議論である。

¹⁶ Peter Brooks が 19 世紀に固有のモードとしてのメロドラマを、「奥」にあるものを「表面」化させる方法として提示するにあたり、繰り返し精神分析のモデルに言及していることは象徴的である。

¹⁷ このような “The Good Anna” の試みは、ウルフ的なモダニズムよりもおそらくロブ＝グリエのヌーヴォー・ロマン的な方向を指し示している。「描写的な部分の興味の一切は——す

なわちそうした部分における人間の位置は——、もはや描写されるもののなかにはなく、描写の運動そのもののなかにあるのである」(ロブ＝グリエ「今日の小説における時間と描写」167-68)。

¹⁸ 以下の議論は、あらずじとして理解してしまえば、恋人を失った Anna がそのショックで死ぬというごくメロドラマチックな過程を追っただけとも言える。しかし本稿の関心は、その過程の中で、「漂流」と「滞留」(の起こす「摩擦」)がどのように展開されているかにある。

引用文献

- Brooks, Peter. *The Melodramatic Imagination*. New Haven: Yale UP, 1995.
- Chessman, Harriet Scott. *The Public Is Invited to Dance: Representation, the Body, and Dialogue in Gertrude Stein*. Stanford: Stanford UP, 1989.
- DeKoven, Marianne. *A Different Language: Gertrude Stein's Experimental Writing*. Wisconsin: U of Wisconsin P, 1983.
- Doane, Janice L. *Silence and Narrative: The Early Novels of Gertrude Stein*. Westport: Greenwood, 1986.
- Dubnick, Randa. *The Structure of Obscurity: Gertrude Stein, Language, and Cubism*. Urbana: U of Illinois P, 1984.
- Haselstein, Ulla. "A New Kind of Realism: Flaubert's *Trois Contes* and Stein's *Three Lives*." *Comparative Literature* 61.4 (2009): 388-99.
- Heldrich, Philip. "Connecting Surfaces: Gertrude Stein's *Three Lives*, Cubism, and the Metonymy of the Short Story Cycle" *Studies in Short Fiction* 3.4 (1997): 427-39.
- Kent, Kathryn R. *Making Girls into Women: American Women's Writing and the Rise of Lesbian Identity*. Durham: Duke UP, 2003.
- Moretti, Franco. *The Way of the World*. Trans. Albert Sbragia. London: Verso, 2000.
- North, Michael. *The Dialect of Modernism: Race, Language, and Twentieth-Century Literature*. New York: Oxford UP, 1994.
- Rowe, John Carlos. "What Is Inside: Gertrude Stein's Use of Names in 'Three Lives.'" *A Forum on Fiction* 36.2 (2003): 219-43.
- Ruddick, Lisa. *Reading Gertrude Stein: Body, Text, Gnosis*. Ithaca: Cornell UP, 1990.
- Stein, Gertrude. *Three Lives*. London: Penguin, 1990.
- . *The Autobiography of Alice B. Toklas*. London: Penguin, 2001.
- Stimpson, Catherine R. "The Mind, the Body, and Gertrude Stein." *Critical Inquiry* 3.3 (1977): 489-506.
- Walker, Jayne L. *The Making of a Modernist: Gertrude Stein from Three Lives to Tender Buttons*. Amherst: U of Massachusetts P, 1984.
- Weinstein, Norman. *Gertrude Stein and the Literature of the Modern Consciousness*. New York: Frederick Ungar, 1970.
- Will, Barbara. *Gertrude Stein, Modernism, and the Problem of "Genius."* Edinburgh: Edinburgh UP, 2000.
- 澁澤龍彦「『さかしま』(初版)あとがき」J.K. ユイスマンス『さかしま』澁澤龍彦訳、河出

文庫、2002 年。369-79 頁。

バルト、ロラン『言語のざわめき』花輪光訳、みすず書房、1987 年。

ロブ＝グリエ、アラン『新しい小説のために』平岡篤頼訳、新潮社、1967 年。